

全般円安、持続・横這い化・反動にらむ

中東情勢、内外の中銀政策、米指標と決算など焦点

今週の為替相場はドル/円、クロス円(円の対非ドル通貨)取引での全般的な円安と外貨高に関して、持続余地と日柄調整による横這い化、反動的な価格調整による円高・外貨安をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が157.50-161.50円、ユーロ/円が184.80-188.80円。前週は米国とイランの停戦協議や米FRBの金融政策動向などに一喜一憂が続いた。今週は米イラン問題や、日加米英欧など内外の中銀政策会合、米国の経済指標、米国ハイテク企業等の決算発表などが焦点になる。

資源国通貨、米イラン対立の緩和・持続でも上昇余地

今週の為替相場で注目されるのは、米国とイランによる停戦・終戦協議の行方だ。前週にかけては協議の行方とホルムズ海峡閉鎖の問題に関して、好悪両面のニュースに一喜一憂が続いた。今週も関連のニュースや要人発言などを見極める展開が続く。

良い材料が出てくると有事のドル買いが後退となり、全般的にドル安が優勢となりやすい。円相場は初期反応として、ドル/円でドル安・円高が進展。クロス円(円の対非ドル通貨)取引でも円高(円高・外貨安)という、円全面高の可能性もある。

2次反応としては米日株など世界的な株価上昇により、リスク選好がクロス円での円安・外貨高を促す。対ドルでの非ドル通貨の上昇により、クロス円でも非ドル通貨の上昇が伝播してくる可能性もある(円安・非ドル通貨高)。その場合、ドル/円でも円高・ドル安の抑制や、クロス円が引っ張る形で円安・ドル高に振れる余地がある。

反対に悪い材料が出てくると、有事のドル買いと全般ドル高が後押しされる。ドル/円はドル高・円安が進展。クロス円はドル/円でのドル高・円安の値幅が大きかったり、原油再上昇で各国中銀の利上げが意識されると、円高・外貨安の抑制や、ドル/円主導での全般円安があり得る。一方でドル高や原油高の度合いが限られたり、米日株など世界株の下落によるリスク回避が大きくなれば、クロス円は円高・外貨安、ドル/円はレンジ横這い化という展開が注視されやすい。

米国とイランに歩み寄りが見られても、原油・ガス・重要物資などは供給制約と価格の高止まりが続く可能性がある。その点で資源国通貨は短期的な上下動はあっても、下値切り上がりの基調が注目されそう。とくに対円では米イランの対立緩和の場合、リスク選好による円安・資源国通貨高へと作用。対立持続の場合でも、資源高止まりと日本の輸入増・貿易収支悪化により、円安・資源国通貨高につながる余地がある。

4月以降、対円で上昇や底堅さが見られている資源国通貨としては、豪ドル、NZドル、カナダ・ドル、ノルウェー・クローネ、メキシコ・ペソ、南アフリカ・ランドなどがある。その他の注目点は以下。

＜イラン封鎖影響、限界は月末か2-3か月か見極め＞

米イラン対立に関して米国は現在、イランへの海上封鎖と石油等の出荷封じを続けることで、イランの現体制が収入源を断たれ、交渉で譲歩してくるといふ圧力をかけている。その中でイランは常に湧き出てくる原油の生産を止めると、生産再開作業の困難さや再開時の暴発リスク等が指摘されている。すでにイランの貯蔵タンクや石油パイプラインは滞留が膨らみつつあり、トランプ米大統領は4月26日、「あと3日ほどで(=29日にかけて)石油パイプラインは爆発する」という見通しを示した。

一方でイランは退役タンカーを使って代替貯蔵したり、石油の抜け道輸送などの対抗策で対応。「イランが深刻に封鎖影響を考えるまでには、2-3か月の猶予がある」(米CNNニュース)といった指摘もある。

その点で今週は29日にかけてイランが譲歩してくるか。あるいは猶予説のほうが正しく、交渉と駆け引きは2-3か月の長期化となるかの見極めとなる。

＜ドル/円の週足、下値抵抗線の上抜け維持焦点＞

為替相場のドル/円は週足テクニカルで、昨夏以降の下値抵抗線の上抜け維持と、各ラインなどを下値メドとしたドルの下値固め、下限切り上がりなどが焦点になっている。ブルームバーグのレートによると、前週末4月24日時点の数値では、下値抵抗線として9週移動平均線158.81円、10週移動平均線158.43円、12週移動平均線157.85円、13週移動平均線157.59円、週足・一目均衡表の転換線157.23円、基準線156.00円などがある。

＜クロス円、節目の上抜けと上向き化を見極め＞

為替相場ではクロス円(円の対非ドル通貨)取引で、4月から外貨の再上昇と円の再下落が見られている。週足テクニカルでは、重要節目ラインの上抜け維持や、トレンドの方向性を示す節目ラインの上向き化を見極める展開となる。

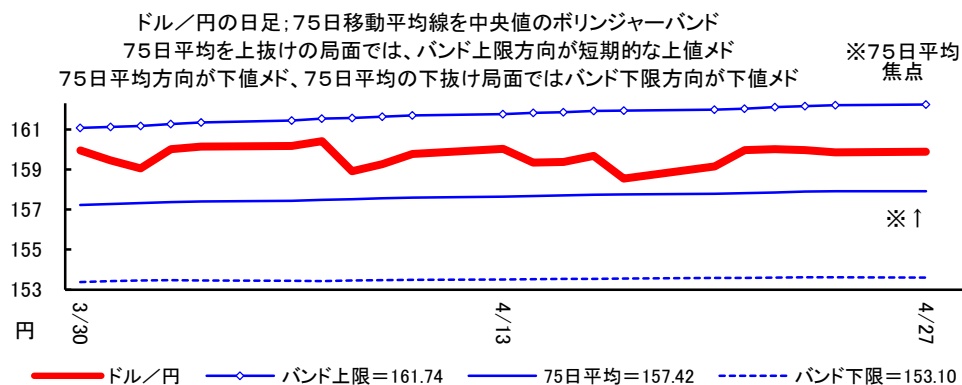
クロス円取引では、ユーロ/円やポンド/円、スイス・フラン/円、カナダ・ドル/円、豪ドル/円、NZドル/円、南アフリカ・ランド/円、ノルウェー・クローネ/円、メキシコ・ペソ/円などで、4週・6週・9週・13週・20週の各移動平均線などについて、上抜けや方向角度の上向き化が焦点になっている。

クロス円取引についてはドル/円と異なり、日本の当局による直接的な円安阻止介入の影響は限られる点も、一段の外貨高・円安の余地残存につながる。

＜日加米英欧の中銀政策会合＞

今週は国内外で中銀の政策会合が相次ぐ。日本では27-28日に日銀の政策会合があるが、予想は現状維持だ。次回6月の利上げ地ならしが強化されると、短期的に全般的な円高と外貨安が後押しされる。一方で15時30分からの植田総裁による会見中や会見後に円安が加速される場合、今年1月の前例として、「日銀レートチェック」といった日本の政策当局による円安阻止対応が注視される。

米国では28-29日にFRBがFOMCを開催する。予想は現状維持であり、パウエル議長にとって最後の会合となる可能性がある。次期議長への配慮もあり、声明、パウエル氏会見ともに、インフレ上昇と景気・雇用悪化の両リスクに目配りした姿勢が示される可能性もある。為替相場では短期的にドル下落やドル上



昇があっても、ドル/円でいえばレンジ相場継続や微妙なドルの下限切り上がり基調が着目されやすい。

29日にはカナダ中銀、30日には英国とECBの政策会合が予定されている。予想は現状維持ながら、それぞれ少しでもインフレ警戒姿勢が強調されると、先行き利下げよりは「据え置き継続や利上げ」が意識され、各通貨の押し目買い要因となりやすい。

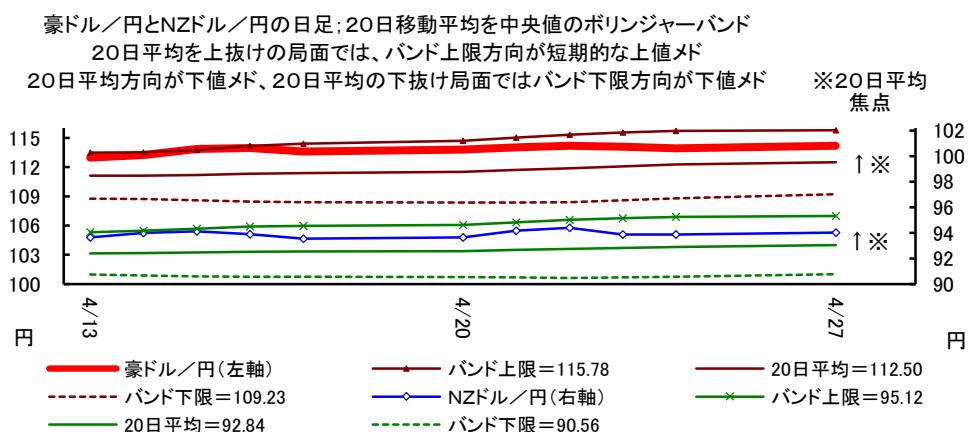
<米国の経済指標>

米国の経済指標は前週にかけて、打たれ強さと資源エネルギー価格上昇等による悪化が交錯していた。今週も強弱の可能性はあるが、4月以降の米国株の反発を見る限り、経済活動関連の下振れやインフレ指標の上振れについては一定の織り込みも進捗しつつある。

<米ハイテク企業等の決算発表>

今週の米国株市場では、29日の前後で主要IT・ハイテク企業が決算発表を予定している。関連株は昨年後半から3月にかけて反落となっており、割高修正や過度な収益上振れ期待の調整は進んできた。足元AI・データセンター関連での需要は根強いほか、中東有事等による供給制約でハイテクの製品単価は上昇となっており、基本的には良好な決算内容が期待されやすい。

ただし4月以降に関連株は急反発となってきた。決算発表後には一旦の好材料出尽くしや、個別内容面での失望などにより、短期調整的な株安リスクにも注意を要する。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。